

大分県現代俳句協会句会報 第29号

令和8年3月30日発行

【第一回雑詠句会結果&第二回雑詠句会選句号】

第一回雑詠作品 結果発表 (選句 & 選評)

17点 巻き戻しきかぬ余生やねじり花

時松由美子

16点 折鶴ににんげんの息長崎忌

足立 攝

16点 ひと言が行き場をなくし梅雨じめり

赤峰佐代子

16点 余生とは捨ててゆくことえごの花

岸本千鶴子

15点 音たてて春を呼び込む野焼かな

時松 千城

14点 向日葵のまん中にある火の記憶

足立 攝

13点 茄子の花つかみどころのない老後

石橋紀公子

13点 鯉幟ガザの子供は空が無い

岡野 紘宣

13点 菜の花も好きな列車があるらしい

仲摩みや子

12点 滝落ちる太古の地層削りつつ

加藤知嘉子

12点 草を刈り棚田の眠り解いてゆく

上田たかし

《10点句》

心太ゆゆしきことはさりげなく
万緑が小心者の背中押す
豆飯やひよっこり亡母が顔を出す
ノースリーブの腕のまぶしき爆心地
小さき歩や一步は無限の夏帽子
立春や門扉わずかに軽くなる

立花真由美
天田 泉美
森山 秀子
神 慶子
天田 泉美
赤嶺 広史

《9点句》

哀楽の言霊をのせ流し雛
青田風陽気な父のねぶか節
舞い終えて静かに消ゆる蛍かな

河野 則子
安部ユリ子
田代 直之

《8点句》

柔らかな雨の匂いに春を知る
湯上りの幼子はみな春の色
寒灯下これで良かった事にする
ラブレター開けば春の風になる
年金の消え行く早さ翳雲

早澤まり子
藤 万 葉
赤嶺 広史
仲摩みや子
時松由美子

《7点句》

春燈や花の如くに手話の指
夏帽子手紙にのこる海のいろ
蛇穴を出て万博の群の中
あの頃は従順でした夾竹桃
点滴の音は自分史新樹光
代掻くやまあるい地球に添ふやうに

宮川三保子
薬師寺裕二
御手洗豊海
高倉 直人
甲斐加代子
立花真由美

《6点句》

薫風やころころと山羊の糞 田代 直之
 沈黙が苦手なんです青嵐 上田たかし
 片蔭に入りて介護の話聞く 加藤知嘉子
 空腹も滋養のうちや天高し 河野 輝暉
 どの家もいつか空く家寒灯下 赤嶺 広史
 正装の毛虫一匹急ぎ足 時松由美子
 言いたくて言えずに湯ざめ傘寿かな 早澤まり子
 戦争が犇めいている蟬の穴 有村 王志
 はつなつやどの隙間から攻めようか 足立 攝
 吾に棲む鬼もいとしき年の豆 有永真理子

《5点句》

大寒や六法全書がデンとある 有村 王志
 父の旅より抜け出して来た蛻蝶 赤峯 友子
 お喋りにどくだみの道伸びてゆく 足立 町子
 軍事費をツイばんでいる磯千鳥 足立 鶴男
 夏草の勢い欲しやわれ八十路 清末ヤヨイ
 たゆたひて海馬の鬮へ花筏 藤 万 葉
 チューリップ咲いてゴッホの絵に戻る 生野 義晴
 砲音が春日に交る日出生台 佐藤 優美
 空家をば三度訪ねし初燕 森山 秀子
 すかんぽとなすこともなく風に乗る 赤峯 友子

《4点句》

春播きの芽の隙間にも世事を知る 溝部 文夫
 前世とはかくの如きカラ・フランス 菅 登貴子
 震度四なすすべもなき冬の蠅 佐藤 優美
 母の日や夫婦茶碗にある月日 河野 洋子
 くるま座で語り合いたい昭和の日 神 慶子
 どの人も行き先のあり初夏の駅 佐藤 律子
 蛭かご記憶の糸を手繰り寄せ 安部スエノ

花惜しむ国籍捨てるといふ友と 川畑英里花
 絵日傘の鳴れば故郷の高さかな 菅 攝子
 意地つぱりだったあの頃トマト盛る 早澤まり子
 初炬燵父と二人の家族論 菅 登貴子
 新米を味わうように活字食む 岸本千鶴子
 古里は海まで続く麦の道 本田 圭子
 かなぶんが神の使いとなる日暮れ 足立 町子
 軒燕夫婦喧嘩を見届ける 古後 粒勝
 つらつらと空豆笑ひ上戸かな 河野 洋子
 昔着イエスの父を知るマリア 高倉 直人
 重き荷を右に持ち変え春立ちぬ 佐藤 律子
 遠い目の今年までかと田水張る 鎌倉真由美
 車椅子の夫の頭上にふる火花 一瀬 祥子
 少年の瞳に映る冬の鬮 小野みち子
 年をとるとはかういふことか蝸牛 天田 泉美
 女郎蜘蛛餌を待つ間も凜として 竹下 邦子

《3点句》

疎まれて屁糞葛に会いに行く 生野 義晴
 薫風や微かに揺れる夢の橋 内田トシ子

たんたん」と読める九条の花吹雪 加藤 征孝
 野を行けば春のポケットあふれくる 本田 圭子
 突き抜けた青空の先ネモフィラの海 赤峰佐代子
 バラ一輪戦地へ向かう兵士にも 石橋紀公子
 今生の余白に咲きぬ濃紫陽花 高橋 玲子
 キーウへと届けし祈り虹の橋 衛藤 和
 指揮棒の放物線に紋白蝶 宮川三保子
 菜の花やクレヨン色の本を抱く 河野 則子
 入学児肩に食い込むランドセル 小田新一郎
 大あくら父の居場所の夏座敷 御手洗豊海
 今日も又九条の歯車見詰めおり 加藤 征孝
 恙無き独りの暮しや茄子の花 高橋 玲子
 一人でも乗れるよ自転車夏帽子 岡村 君香
 晩鐘の余韻ななめに麦の秋 立花真由美
 丸菓を十粒ほどの梅雨湿り 加納 知子
 花水木咲きてあの日の庭となる 甲斐 伸子
 父母と新茶つみたる今は過去 大神 愛子
 蝉しぐれ怠惰な日々を責めるよに 下司 正昭
 ふらここに思いゆだねる五十路かな 菅 登貴子
 探すのは止せ生きる意味水羊羹 海神 瑠珂

第一回雑詠句会 作品集(点盛)

第一回雑詠句会には74名の会員から221句が集まりました。作品番号の下の○印が採られた数(点盛)です。今号には第2回雑詠句会の選句用作品集と、第1回雑詠句会の募集が掲載されています。

- 1 ①猪の畏に人の香消す煙 牧野 桂一
- 2 春の泥泣虫太郎膝小僧 牧野 桂一
- 3 ①麦は穂に非核宣言田を灯す 牧野 桂一
- 4 ⑮音たてて春を呼び込む野焼かな 時松 干城
- 5 ①焼け残る萱の小鳥の遊び声 時松 干城
- 6 ①新緑のキャンパスに描く焼け残り 時松 干城
- 7 ④春播きの芽の隙間にも世事を知る 溝部 文夫
- 8 ①影にても背おえば重し孫の春 溝部 文夫
- 9 ⑬鯉幟ガザの子供は空が無い 岡野 紘宣
- 10 春雨を集めて早し二毛作 岡野 紘宣
- 11 花莫盛で点滴受ける幸せよ 岡野 紘宣
- 12 ②水仙花玄関に置く男靴 宮川三保子

- 13 ⑦春燈や花の如くに手話の指 宮川三保子
- 14 ③指揮棒の放物線に紋白蝶 宮川三保子
- 15 地ビールを小脇にゴロ寝老岐の帰路 新志 光夫
- 16 ①巢立鳥ライン既読に無事知らず 新志 光夫
- 17 ②逃げ水や七十路いまだ道半ば 新志 光夫
- 18 ②恋しさも中ぐらい鳴り海酸漿 菅 攝子
- 19 ②野蒜引く額明るし母郷かな 菅 攝子
- 20 ④絵日傘の鳴れば故郷の高さかな 菅 攝子
- 21 ③父母と新茶つみたる今は過去 大神 愛子
- 22 ①ツバメ飛ぶ姿消しゆく令和の空 大神 愛子
- 23 仏前にカーネーション映ゆる朝 大神 愛子
- 24 ①興に乗りワルツ踊ればおぼろ月 足立 鶴男
- 25 ①米作りイブキ実のれば平和なる 足立 鶴男
- 26 ⑤軍事費をツイばんでいる磯千鳥 足立 鶴男
- 27 ⑥言いたく言えずに湯さめ傘寿かな 早澤まり子
- 28 ⑧柔らかな雨の匂いに春を知る 早澤まり子
- 29 ④意地つぱりだったあの頃トマト盛る 早澤まり子
- 30 ⑤たゆたひて海馬の闇へ花筏 藤 万葉
- 31 ⑧湯上りの幼子はみな春の色 藤 万葉
- 32 ①花嫁の憂いのごとく白菖蒲 藤 万葉
- 33 泉下にて吾子は達者とほととぎす 河野 輝暉
- 34 松芽摘む手首の若さ雲が知る 河野 輝暉
- 35 ⑥空腹も滋養のうちや天高し 河野 輝暉
- 36 ①春風や煩惱色の服まとい 河野 則子
- 37 ⑨哀楽の言霊をのせ流し雛 河野 則子
- 38 ③菜の花やクレヨン色の本を抱く 河野 則子
- 39 ⑤チューリップ咲いてゴッホの絵に戻る 生野 義晴
- 40 ③疎まれて屁糞葛に会いに行く 生野 義晴
- 41 ①愛しき妻寝入り端なる藤寝椅子 生野 義晴
- 42 とんがりて共に競うやはずむ春 安部ユリ子
- 43 ⑨青田風陽気な父のねぶか節 安部ユリ子
- 44 ①春の宵ふたつの盃に名は美吟 安部ユリ子
- 45 ④軒燕夫婦喧嘩を見届ける 古後 粒勝
- 46 ②桜貝少年雨に濡れてゆく 古後 粒勝
- 47 筍や三年日記をまづめくる 古後 粒勝
- 48 ③蟬しぐれ怠惰な日々を責めるよに 下司 正昭
- 49 ②勇人君！戦後の麦めし不味かった 下司 正昭
- 50 炎天のデモにマドンナ・ウーマン・リヴ 下司 正昭
- 51 ③ふらふらに思いゆたねる五十路かな 菅 登貴子
- 52 ④前世とはかくの如きカラ・フランス 菅 登貴子
- 53 ④初炬燵父と二人の家族論 菅 登貴子
- 54 ⑥戦争が犇めいている蟬の穴 有村 王志
- 55 ⑤大寒や六法全書がデンとある 有村 王志
- 56 ②晩年の男の背ナのふと寒き 有村 王志
- 57 ②万緑の扉を開ける夜雨かな 内田トシ子
- 58 ③薫風や微かに揺れる夢の橋 内田トシ子
- 59 恋ふ花に並ぶひと時夏の蝶 内田トシ子
- 60 ⑤砲音が春日に交る日出生台 佐藤 優美
- 61 ④震度四なすすべもなき冬の蠅 佐藤 優美
- 62 ①へソ天の猫と私の夏座敷 佐藤 優美
- 63 ④つらつらと空豆笑ひ上戸かな 河野 洋子
- 64 ④母の日や夫婦茶碗にある月日 河野 洋子
- 65 ②衣更へとは身心のリフレッシュ 河野 洋子
- 66 ⑤空家をば三度訪ねし初燕 森山 秀子
- 67 ①孫の来るを待つひとときや赤きバラ 森山 秀子
- 68 ⑩豆飯やひよっこり亡母が顔を出す 森山 秀子
- 69 梅雨入りで蛙も忙し大合唱 小田新一郎
- 70 香り立つ山一面に椎の花 小田新一郎
- 71 ③入学児肩に食い込むランドセル 小田新一郎
- 72 ⑨舞い終えて静かに消ゆる蛍かな 田代 直之
- 73 ⑥薫風やころころと山羊の糞 田代 直之
- 74 ①片隅に君の名記して袋掛 田代 直之
- 75 ⑩立春や門扉わずかに軽くなる 赤嶺 広史
- 76 ⑧寒灯下これで良かった事にする 赤嶺 広史
- 77 ⑥どの家もいつか空く家寒灯下 赤嶺 広史
- 78 ①新茶揉む父母の手数の懐かしや 永松左世美
- 79 ①こでまりや八方美人の態をして 永松左世美
- 80 ①花冷えのヘッドライトの朝出かな 永松左世美
- 81 ②子の家へ去る友の来て夏座敷 安森 範明
- 82 アンパンに長き行列夏の空 安森 範明
- 83 ②夕桜母校の生徒空爆に 安森 範明
- 84 ④昔昔イエスの父を知るマリア 高倉 直人
- 85 ①ぶぎつちよな箸の握りや秋高し 高倉 直人
- 86 ⑦あの頃は従順でした夾竹桃 高倉 直人
- 87 ①黒南風の暖簾ごとく風孕む 薬師寺裕二
- 88 ⑦夏帽子手紙にのこる海のいろ 薬師寺裕二
- 89 碧空をしるべとしたり夏帽子 薬師寺裕二
- 90 ⑥はつなつやどの隙間から攻めようか 足立 攝
- 91 ④向日葵のまん中にある火の記憶 足立 攝
- 92 ⑥折鶴ににんげんの息長崎忌 足立 攝
- 93 ②五月雨に流れてしまえこの想い 森崎 洋子
- 94 ①弓ひけば早朝の音すがすがし 森崎 洋子
- 95 涼やかな公園の中犬と我 森崎 洋子
- 96 ②梅雨寒や法事案内の手書き文 井上 則子
- 97 豊作にいざ腕まくり梅仕事 井上 則子
- 98 ①早苗田を見渡す老夫背に夕日 井上 則子
- 99 ②虹二重くぐつてみたい縄電車 御手洗豊海
- 100 ⑦蛇穴を出て万博の群の中 御手洗豊海
- 101 ③大あぐら父の居場所の夏座敷 御手洗豊海
- 102 ②戦争はいやだと八月の空が 加藤 征孝
- 103 ③たんたんと読める九条の花吹雪 加藤 征孝
- 104 ③今日も又九条の歯車見詰めおり 加藤 征孝
- 105 ⑫草を刈り棚田の眠り解いてゆく 上田たかし
- 106 ⑥沈黙が苦手なんです青嵐 上田たかし
- 107 ①ホトトギス峡の孤立を深めてる 上田たかし
- 108 ⑩余生とは捨ててゆくこととこの花 岸本千鶴子

139138137136135134133132131130129128127126125124123122121120119118117116115114113112111110109

① 広重のぶるうこぼれて牽牛花 岸本千鶴子
 ④ 新米を味わうように活字食む 岸本千鶴子
 ③ 探すのは止せ生きる意味水羊羹 海神 瑠珂
 ② 先生は出しゃばらないで夏の雲 海神 瑠珂
 妻振るいし雑誌に死せりゴキブリは 海神 瑠珂
 岩苔や郭公森をひとり占め 時松ヤスコ
 ② 早苗田の光る細波母の影 時松ヤスコ
 ① 夏蛙タクトは風のコンサート 時松ヤスコ
 ② 老年の夢はそこそこ花は葉に 神 慶子
 ④ くるま座で語り合いたい昭和の日 神 慶子
 ⑩ ノースリーブの腕のまぶしき爆心地 神 慶子
 ⑬ 菜の花も好きな列車があるらしい 仲摩みや子
 ⑧ ラブレター開けば春の風になる 仲摩みや子
 ② 夫の視線浴びて刺きたる夏みかん 仲摩みや子
 猫抱いて散歩する人秋彼岸 本田 圭子
 ③ 野を行けば春のポケットあふれくる 本田 圭子
 ④ 古里は海まで続く麦の道 本田 圭子
 ① あと三日待つておくれか蝸蚪生まる 赤峰佐代子
 ③ 突き抜けた青空の先ネモフィラの海 赤峰佐代子
 ⑯ ひと言が行き場をなくし梅雨しめり 赤峰佐代子
 ① 藤の根にがんじがらめになる地形 佐々木 玉
 ① 坂道を転がっていく蝸牛 佐々木 玉
 ② 靴べらでかかと滑らし夏にいる 佐々木 玉
 健やかな風に行き交う薔薇の畏 石橋紀公子
 ③ バラ一輪戦地へ向かう兵士にも 石橋紀公子
 ⑬ 茄子の花つかみどころのない老後 石橋紀公子
 ① 万の紫陽花なかのひとつに母の顔 高橋 玲子
 ③ 今生の余白に咲きぬ濃紫陽花 高橋 玲子
 ③ 恙無き独りの暮しや茄子の花 高橋 玲子
 雨似合うみずほの国は脈脈と 清末ヤヨイ
 草刈女馬草牛草今は昔 清末ヤヨイ

170169168167166165164163162161160159158157156155154153152151150149148147146145144143142141140

⑤ 夏草の勢い欲しやわれ八十路 清末ヤヨイ
 旅人となりて春日の二条城 佐藤 次江
 鉄線花密かに咲いて絹の雨 佐藤 次江
 思い出の母の抱えしグラジオオラス 佐藤 次江
 ④ 重き荷を右に持ち変え春立ちぬ 佐藤 律子
 ④ どの人も行き先のあり初夏の駅 佐藤 律子
 ② 愛子さま御印ゴヨウツツジかな 佐藤 律子
 ④ 遠い目の今年までかと田水張る 鎌倉真由美
 草刈女ぼつんと張った丸い腰 鎌倉真由美
 ① 不安症という病もありて夏 鎌倉真由美
 ④ 車椅子の夫の頭上にふる花火 一瀬 祥子
 ② 盆までの生命と聞きし真昼時 一瀬 祥子
 ① わが夫は単身赴任涅槃西風 一瀬 祥子
 ⑦ 点滴の音は自分史新樹光 甲斐加代子
 ② 過疎埋める一と役なれず日飲の花 甲斐加代子
 夏風邪に微笑みたむ句帖在り 甲斐加代子
 憂ひてもなほ鮮やかに濃紫陽花 幸谷 恵子
 短夜や目覚めては彼の人恋し 幸谷 恵子
 ② 亀の子をそとつとまみて買うてみる 幸谷 恵子
 ⑤ すかんぼとなすこともなく風に乗る 赤峯 友子
 ⑤ 父の旅より抜け出して来た蛭蝶 赤峯 友子
 雨予報少し外れて枇杷たわわ 赤峯 友子
 ⑥ 吾に棲む鬼もいとしき年の豆 有永真理子
 ② 断ち切れぬ戦の連鎖梅雨深し 有永真理子
 ① 花菖蒲見つむ母の背われもまた 有永真理子
 夏の朝びんたの教え亡父無口 佐藤 哲夫
 ① チェンソーを止めて静寂夏の蔭 佐藤 哲夫
 ② コミバスのコース変更田植盛り 佐藤 哲夫
 ② 亡骸を粧う晴れ着や春の朝 岡村 君香
 ピカピカの入園グッズみな恐竜 岡村 君香
 ③ 一人でも乗れるよ自転車夏帽子 岡村 君香

201200199198197196195194193192191190189188187186185184183182181180179178177176175174173172171

① 数独の解けてほゝえむ夏の汗 衛藤 和
 ③ キーウへと届けし折り虹の橋 衛藤 和
 ② 駅ピアノ弾きおくんちを締めくくる 衛藤 和
 ① ソーダ水予定のある日戻り来る 加藤知嘉子
 ⑥ 片蔭に入りて介護の話聞く 加藤知嘉子
 ⑫ 滝落ちる太古の地層削りつつ 加藤知嘉子
 ② くちなしが垣根を越えてついでくる 安部スエノ
 ④ 蛭かご記憶の糸を手繰り寄せ 安部スエノ
 梨畑蝉しぐれに背を押され 安部スエノ
 京鹿の子人待ち顔の富士の嶺 菅 勲
 海荒れし舳先佇む冬遍路 菅 勲
 放棄地や媪の力花菖蒲 菅 勲
 ② アウトバイン飛ばせアスバラガスを追え 川畑英里花
 ④ 花惜しむ国籍捨てるといふ友と 川畑英里花
 ② オクラホマ・ミクサー踊らう麦の秋 川畑英里花
 ① 老鶯や早くお帰り夕暮れる 林 香澄
 ② 君づけで母を呼ぶ父の日や 林 香澄
 野イバラや歩み来たりて道一本 林 香澄
 ① 籐椅子の藤のほつれや幾年が 志賀 文子
 独り居の声出し問答夏はじめ 志賀 文子
 スリッパを藪に替えてスキップす 志賀 文子
 ⑯ 巻き戻しきかぬ余生やねじり花 時松由美子
 ⑧ 年金の消え行く早さ鱗雲 時松由美子
 ⑥ 正装の毛虫一匹急ぎ足 時松由美子
 花曇晴れやかに友退院す 白土 正江
 鴉の子吾子との日々を思い出す 白土 正江
 夏めくや生を得てリハ中の我 白土 正江
 ⑦ 代掻くやまあるい地球に添ふやうに 立花眞由美
 ⑩ 心太ゆゆしきことはさりげなく 立花眞由美
 ③ 晩鐘の余韻ななめに麦の秋 立花眞由美
 ① 奥能登の傷跡深しつばめくる 加納 知子

211	212	209	208	207	206	205	204	203	202	
⑩万緑が小心者の背中押す	④年をとるとはかういふことか蝸牛	①格子戸をくぐりぬけたらそこは夏	②からたちの花をあげよう君だから	④少年の瞳に映る冬の闇	白鷺の給餌は田んぼほしいまま	両の手に掬いこぼるる清水かな	①ざわざわと大気騒めく花田植	③丸菓を十粒ほどの梅雨湿り	②天にのぼる童の尻尾につかまつて	
天田 泉美	天田 泉美	小野みち子	小野みち子	小野みち子	安田 文	安田 文	安田 文	加納 知子	加納 知子	
221	220	202	192	182	172	162	152	142	132	121
④かなぶんが神の使いとなる日暮れ	⑤お喋りにどくだみの道伸びてゆく	②溜息をいくつ残して藤の花	柚子の花畑で見れば土気色	④女郎蜘蛛餌を待つ間も凜として	③水木咲きてあの日の庭となる	①春雷に「恐かったね」と猫をたく	①春雷に「恐かったね」と猫をたく	君がいた天領日田や花曇	⑩小さき歩や一步は無限の夏帽子	⑩小さき歩や一步は無限の夏帽子
足立 町子	足立 町子	足立 町子	竹下 邦子	竹下 邦子	甲斐 伸子	甲斐 伸子	甲斐 伸子	甲斐 伸子	天田 泉美	天田 泉美

第一回雑詠句会・選 & 選評 ◆ 到着順 ◆

第一回雑詠句会作品221句を71名の選者で選句しました。今回のゲスト選者は天籟通信の夢野はる香さん、山本悦子さん、上野一子さんです。この通信句会の選句は多様な価値観を取り入れるために、会員外の俳人にもお願いしています。ご協力ありがとうございました。

岡野 紘宣 選

《4・43・63・73・80・92・100・101・198・199》
73 薫風やころころと山羊の糞
田代 直之

薫風と糞の対比が面白い。軽妙で巧みである。「ふん」よりも「くそ」の方が印象に残る。なので「くそ」が好き。

宮川三保子 選

《7・9・27・54・91・100・133・136・150・212》
150 車椅子の夫の頭上にふる花火
一瀬 祥子

御主人の車椅子を押して大勢の人垣の中を花火を見に出かけた様子がよくわかります。御主人の頭上に広がる鮮やかな花火。御夫婦の絆の深さが心に染みしました。

有村 王志 選

《9・17・27・108・134・137・159・199・210・212》
212 小さき歩や一步は無限の夏帽子
天田 泉美

小さき歩は子供から大人へと変わる、その一步は将来に向けて無限の可能性を秘めている。この句の場合、小さき一步は子供の姿とも取れるが、もう一方人生の第一歩ともとれる。下五の夏帽子が巧み。柔らかな詩情にあふれている。

菅 攝子 選

《37・51・52・76・88・91・120・121・177・219》

小野みち子 選

《76・86・88・90・108・112・134・159・194・199》

牧野 桂一 選

《13・26・39・54・71・92・129・153・176・192》
153 点滴の音は自分史新樹光
甲斐加代子

作者は病床にあつて静かな部屋の中では点滴が規則正しく落ちています。喜びも悲しみも溶け込んだ透明な一滴の雫にして体内へと還って行きます。病室の窓の外には、眩しいほどに明るいエネルギーが満ちた新緑が輝いています。自分の人生への確かな確認として。

清末ヤヨイ 選

《29・36・38・63・108・121・192・194・207・220》

佐藤 優美 選

《13・73・77・111・140・176・192・193・194・199》
194 正装の毛虫一匹急ぎ足
時松由美子

赤や緑の地に真黒い毛をケバケバしくたてた毛虫が一匹動いている。それを正装の毛虫ととらえた作者の着眼点がみごとで、一生けん命に歩巾をとっているのを急ぎ足とみているのがおもしろい。こんな毛虫も今は街中ではみかけることはほとんどない。こんな生き物をみれる環境に住みたいものだ。

菅 登貴子 選

《7・13・14・18・20・37・66・84・160・208》

小川 良子 選

《35・51・58・93・108・110・121・151・186・193》
58 薫風や微かに揺れる夢の橋

内田トシ子

快よい風に微かに揺れる夢の橋の光景が印象的でした。

足立 攝 選

《13・20・61・84・125・134・145・152・200・221》

84 首蓓イエスの父を知るマリア

高倉 直人

全国水平社運動の先駆けとなった平塚らいてうは「元始、女性は大陽であつた」という言葉を残した。唯一胎児の本当の父親を知る立場にいる母親は、文明の黎明期には優位に立ち母系社会を形づくつたのである。

さて、新訳聖書で処女マリアは受胎告知によってイエスを身ごもつたとされる。「そんな、ばかな」というのがキリスト教を信仰していない者の一般的な感想であろう。「物語でなく本当は……」という不敬な発想がすばらしい。キリストが生まれたのが日本では既とされているので、首蓓の季語も絶妙。

古後 粒勝 選

《39・86・91・108・110・120・194・198》
86 あの時に従順でした夾竹桃

高倉 直人

あの頃とは？どんな頃だろう。従順だったのはだれ？想像は無限。多くを言わず答えを出さず、それでいて想像の広がる一句。お見事です。

河野 輝暉 選

《19・31・37・43・44・52・88・112・151・220》
19 野蒜引く額明るき母郷かな

菅 攝子

額が象徴する肉体が、母郷と野蒜に一体化しているのが見事。一人の小さい存在の小さい額に、フットライトの様に広大な母郷が照り返している。小景と大景のコントラストがまた見事。推敲を重ねた結果か、即興か聞きたいところだが、奇を衒わず、新しさに迎合もしていない風雅がある。「摘む」ではないか、と思つたが、それでは球根がついて来ない。酒の肴にこの部の味噌和えが垂涎の的なのだから。「故郷」でなく、母なる大地に伏して泣けてくる。

大神 愛子 選

《37・41・45・67・72・101・136・147・176・192》
72 舞い終えて静かに消ゆる螢かな

田代 直之

一昨年までは、近くの川ぞいに螢を見にいた。娘と孫娘と今は亡き主人と遠く白山まで行った。33年前4歳上の姉が息を引き取る寸前に螢が父と私の目の前を舞い消えて1分後、姉が息を引き取つた。あれ以来螢への思いが強く心に引かれる螢火。もう33回忌も終わった今、私はヒザも痛く歩いて行く事も出来ず、今でも心の中は螢への思いを抱いています。この句は私の心に入ってきて大好きな句です。

足立 鶴男 選

《21・55・66・93・103・124・125・172・176・193》

早澤まり子 選

《17・55・66・88・102・128・134・154・192・200》
192 巻き戻しきかぬ余生やねじり花

時松由美子

今や長寿の時代と言われています。若い時には戻れません。喜び、悲しみ、怒り、悔いを残しながら、いつも反省しながら生きて来たと思えます。誰もがそうではないでしょうか。改めて考えさせられます。あとの人生をしっかりと生きて行こうと思えます。

季川 詩音 選

《9・37・49・72・83・96・121・172・176・184》
49 勇人君！戦後の麦めし不味かつた

下司 正昭

戦争が終わつたいまだからこそ言えることは、きつとたくさんあるのだろう。戦時中は、どんなものでも「美味しいね。」と噛みしめながら食べていたのではないだろうか。また、どんな食べ物かは読み手に委ねられていると思う。もし、主人公が「残留日本兵」であれば、現地の食べ物のことかもしれない。そして、私ならば地名などを入れて出来事を限定させるところを、あえて入れずに限定していないところも大変興味深いと私は考えた。

山本 悦子 選

《29・53・63・92・105・110・173・178・183・215》

新志 光夫 選

《30・61・68・75・102・117・118・144・176・192》

118 くるま座で語り合いたい昭和の日

神 慶子

読み手の年齢によって、意味合いは、違って来ると思うが、昭和という言葉の響きには、青春を激動の昭和に生きた者には、特別の感慨がある。この年齢になると、語り合える友も少なくなつて寂しい限りだ。語り合いたい、と言う中7に哀感が滲む。

永松 左世美 選

《39・43・68・91・128・134・170・178・198・210》

198 代掻くやまあるい地球に添ふやうに

立花真由美

代を掻くとそんな気持になるものだろうか。表面のつるつと感が何ともなつかしく思えてくる田んぼの景色だと思う。

時松由美子 選

《4・43・45・108・117・127・153・210・220》

45 軒燕夫婦喧嘩を見届ける

古後 粒勝

何とおもしろい句でしょうか、発想がおもしろい。燕は静かに卵をむしていたのかもしれない。夫婦は知らずに喧嘩を続けていたのでしようか。私もつばめも笑いました。

安部ユリ子 選

《39・73・100・105・119・121・133・159・163・211》

藤 万 葉 選

《38・52・92・108・120・128・175・192・215・221》

52 前世とはかくの如きカラ・フランス

菅 登貴子

この句を読んですぐにかんだのが広渡敬雄の「横顔は子規に如くなしラフランス」である。作者もラフランスを食べる時に子規の横顔を思い出すのだろうか？ユーモアもあり自分や誰かが生まれ変わったらとか前世は何だったとか想像するのはちよつと面白い。

安森 範明 選

《31・37・96・150・167・168・170・175・193・216》

193 年金の消え行く早さ 綱雲

時松由美子

高令者は、介護保険料、後期高令者保険料、は今でも高いと思うが、まだ上げるとか。若い人は、賃上げが続く。年金者は手取りが減っていく「年金が消えゆく早さ」医療費も重み大変ですね。

甲斐加代子 選

《27・30・57・92・108・128・144・154・159・162》

内田トシ子 選

《9・14・32・46・86・106・127・146・173・202》

32 花嫁の憂いのごとく白菖蒲

藤 万 葉

菖蒲は紫色が目につきますが、白菖蒲の花純潔が花嫁と響き合います。六十年近く前、私の結婚に屋敷に多くの菖蒲を咲かせてくれた親心と、自分の不安も喜びと共に感じた事を思い出

しました。

河野 則子 選

《35・72・87・90・105・120・144・145・171・212》

145 どの人も行き先のあり初夏の駅

佐藤 律子

この句は「行く先のあり」が、春から夏にかけて希望に満ちた駅の賑いを描写している。やもすると駅という「行く先が無い、無人駅、誰も無口」等と暗い面の俳句をよく見かける。こういう既視感俳句ばかりに流されずに、手垢のつかない、明るい社会事象を捕らえて句材にすること。それが芸術の自由性であり、前頭葉の活性化にもつながるのでは。掲句はそんな事を示唆して十分と思う。

時松ヤスコ 選

《4・27・43・56・86・126・134・140・193・202》

126 あと三日待つておくれか 蝸蚪生まる

赤峰佐代子

田ごしらえが始まった。用水路や水溜りの枯草の中に何やらゼリー状のものが……。中には小さな黒いものが動いている。おたまじゃくしがふ化を待っています。お願い!!代掻きをあと一寸待つて下さい。春の動きと優しさが感じられます。

加藤 征孝 選

《22・43・92・104・109・140・146・160・193・208》

193 年金の消え行く早さ 綱雲

時松由美子

いつの間にか年金を貰う年齢になつたと思っ

たら八十をすぎてしまった。一人ぐらしのはずが思う通りいかない。結局は何とかしのいでいるが……。

御手洗豊海 選

《24・28・72・86・162・168・176・178・192・207》

上田たかし 選

《9・43・54・55・60・99・104・121・128・212》

43 青田風陽気な父のねぶか節

安部ユリ子

過酷な労働を通じて、しばし憩えるひとときを見事に捉えている。厳しい農家の生活の中に、その目標を達成も得た喜びが、父親の破目はずした音程となつて表現され、共感を呼ぶ。

鎌倉真由美 選

《40・73・76・90・91・92・105・128・134・199》

105 草を刈り棚田の眠り解いてゆく

上田たかし

冬から眠りの中にいる棚田。畦草が伸び、農夫が田植の為の草刈を始める「さあ田植えのシーブンだよ。そろそろ眠りから覚めて」と。詩的に表現された、眠りを解いてゆくフレーズがやさしくて好きです。

生野 義晴 選

《1・21・43・48・55・101・122・140・167・204》

48 蝉しぐれ怠惰な日々を責めるよに

下司 正昭

まさに共感の一句です。とりたてて思い当る節はなくても、よくよく考えればそうかも知れ

ないと錯覚しそうです。いや事実そういう気分になったこともあるかも知れぬ……：心中がざわざわしてくるから不思議です。もしかして作者は何かしら怠惰な日々が実際にあったのかも知れませんが。又、一般論として読者に共感を求めるような意思があつたのでしょうか。いずれにしても誰にでもある心象風景だと思いました。

丘 友子 選

《28・53・54・62・68・115・119・128・153・193》

54 戦争が犇めいている蝉の穴

有村 王志

正に今の一触即発の世界情勢を言い表している。中七の犇めいているが効いている。不戦八十年の日本も危機感を感じる今日、この頃。しかし武力と武力では平和は守れない。八十年前、不戦の誓いをした日本国憲法を再確認したい。

安田 文 選

《4・35・64・75・108・124・134・170・192・220》

神 慶子 選

《4・9・13・29・48・75・91・120・125・175》

田代 直之 選

《68・91・92・100・105・108・119・194・212・221》

安部スエノ 選

《27・28・60・66・73・98・140・147・166・209》

147 遠い目の今年までかと田水張る

鎌倉真由美

稲作りも長いことががんばってされてこられた、

でもどうしてもこれ以上は……。田んぼの水取りをしながら今年までかと、悔しんでなつかしんでおられる様子がわかります。亡父の姿と重なってグツとくるものがあります。

天田 泉美 選

《30・75・119・120・131・144・153・185・198・207》

75 立春や門扉わずかに軽くなる

赤嶺 広史

春が立つという感じは、自分の回りのことを素直に感じることでできる私たち日本人ならではの感じ方のように思います。毎日の日常の中で開け閉めしている門扉の重さは変わるものではないと思います。それを作者は「わずかに軽くなる」と感じています。まだまだ寒さの中にあつても春をイメージさせ、春に向うんだという前向きな心を感じさせてくれる一句でした。

中摩みや子 選

《7・25・43・64・68・106・172・189・192・216》

立花真由美 選

《14・46・75・92・103・106・160・183・187・203》

187 君づけで母を呼ぶ父の日や

林 香澄

お父様はすでに亡くなられているのでしよう。とても紳士でリベラリストの方だったであろうと想像した。「君づけで母を呼ぶ」さりげないエピソードからお父様を人として、父親として尊敬されている作者の心情を淡々と、しかし、万感を込めて詠んでいる。

夫と妻、親と子の丁寧で美しい暮らしが窺え

て、小津安二郎の映画を彷彿とさせる。

川西 達子 選

《9・26・52・108・134・163・176・187・192・212》

134 茄子の花つかみどころのない老後

石橋紀公子

忙しかった現役時代、いくつもの役職、肩書きの枷がはずれて、ほっとしてはいるが、なんとなく手持無沙汰。中七下五の表現がよかったと思いました。季語の「茄子の花」のように、今までの人生なにも無駄はなかった。すべて結実。老後をお幸せに!!

志賀 文子 選

《4・28・60・65・72・81・92・115・116・153》

4音たてて春を呼び込む野焼かな

時松 干城

飯田高原の春の風物詩 野焼き その燃え盛る音 春は黒、草原の黒い色から新緑が芽吹き始め 待ち遠しかった春です。

佐藤 次江 選

《72・84・86・119・128・162・192・212・214・216》

高橋 玲子 選

《4・9・26・68・92・108・160・162・176・211》

68 豆飯やひよっこり亡母が顔を出す

森山 秀子

掲句を読んで二年前に他界した母が恋しくたまらなく会いたくなりました。三人姉妹で母と二人の妹達は豆ご飯が大好きで時期になるとご近所さんが取りたての豆を何度も届けてくれま

した。何故か私だけ大嫌いでした。そんな私だけに母はおかずを別に二、三品も用意して気を使ってくれたのです。それぞれに家庭をもち実家に集う度に豆ご飯の時は変らず母は私のことを大事にしてくれ今になり申し訳ない後悔です。

高倉 直人 選

《35・45・64・65・75・76・77・108・128・134》

64 母の日や夫婦茶碗にある月日

河野 洋子

長年使ってきた夫婦茶碗が残っている。今では母しか使っていないが、二つ並べて見ていると在りし日の父と母の会話や笑顔や優しさが伝わってくる。よく喧嘩もしていたが、孫には格別な愛情を注いでくれた両親のさまざまな温かさがないじみ出てくるようだ。「夫婦茶碗にある月日」という措辞にほのぼのとした両親の生きざまが見えてくる感じがします。

本田 圭子 選

《4・28・48・68・72・99・119・121・134・192》

森崎 洋子 選

《4・21・28・35・57・72・108・128・177・184》

衛藤 和 選

《4・28・68・77・106・118・185・192・199・212》

192 巻き戻しきかぬ余生やねじり花

時松由美子

ねじり花が人生の歩んで来た道を表わしているように思われました。私自身に於てはこれほど美しく上を向いてはいませんが、ものごと、

時代の変化、今さら戻ることの出来ないこと、人生の節目くくが有り、そのことを、この日のねじり花が語っているように思われました。どんなねじれることがあってもこの花のように上を向いて歩みたいと思います。

加藤知嘉子 選

《9・13・29・31・40・74・118・119・198・211》

岡村 君香 選

《9・28・61・75・76・91・105・107・119・128》

61 震度四なすすべもなき冬の蠅

佐藤 優美

地震大国の日本。特に近年は大地震が頻発しており、緊急速報を聞くだけでも恐怖に身がすくみます。震度四はかなりの揺れ、まさに、なすすべもない「冬の蠅」状態だと共感しました。

幸谷 恵子 選

《20・37・49・73・81・91・119・130・193・201》

49 勇人君：戦後の麦飯不味かった

下司 正昭

勇人は誰？ 麦めしは何？ そうです、総理大臣をされた池田勇人氏の発言「貧乏人は麦飯を食え」のことでしょう。一九五十年に私はまだ生まれていませんが、この言葉は覚えています。それほど衝撃的な言葉だった訳です。麦飯のまづさはあの縦の筋がのどにつまりそうに感じたもので共感。そして現在世の中はまた物価高です。作者は短絡的ではない解消策を望んでいるのでしよう。そして少し政治の関心が高かった時代を懐しんでいるのであろうか。

小田新一郎 選
《4・5・68・71・72・75・105・121・150・176》

南雲 玉江 選

《9・26・54・106・153・176・192・199・200・211》

200 晩鐘の余韻ななめに麦の秋

立花眞由美

夕暮れ時の鐘の音が消えたあとと黄金色の麦畑にも、風とともに音色が広がってゆく。鐘の余韻が形として見えてきそうです。

國廣 精善 選

《4・6・9・27・88・92・119・164・178》

92 折鶴ににんげんの息長崎忌

足立 攝

中七、「にんげんの息」がよい。折鶴を折った人の怒りや悲しみ、願いなどが、生身の人間から伝わってくるようだ。また、息と忌で、生と死の対比が伝わり、長崎原爆忌八十年の節目と世界平和の願いも伝わってくる句である。

林 香澄 選

《31・61・100・111・120・134・135・136・158・211》

61 震度四なすべもなき冬の蠅

佐藤 優美

これ以上ならば蠅の目の色が変わっている。

以下ならば、まあ、まず。日本の生きとし生けるものは、地震スペンチャリスト。しら真剣だが、回数が多過ぎて、緩む。恐ろしいところを蠅に託してリズムよく詠んでいる。

加納 知子 選

《13・77・91・108・128・159・175・199・215・221》

井上 則子 選

《9・30・60・76・104・105・128・192・194・211》

60 砲音が春日に交る日出生台

佐藤 優美

日出生台演習の砲音は、私の住む里にも響いてきます。毎年牧草が萌え出す頃に日米合同訓練が始まります。いったい何のための演習？ 防衛って地上戦の？ 九条はどこに行った？

の？ 九条はどこに行った？

下司 正昭 選

《3・54・60・91・92・103・108・128・192・219》

60 砲音が春日に交る日出生台

佐藤 優美

今年も日出生台で日米合同訓練が始まるうとされている。今年はりゅう弾砲に新兵器を加えての演習だそうである。しかし、近代戦に於いては、先ずサイバー攻撃で国の通信網をズタズタにし、次に無人機で空爆、そして最後はA Iの兵が占領する。いつまでも戦車、大砲等の時代ではないのである。

それこそ税金の無駄遣いである。即刻止めてサイバー攻撃等の対策に力を注ぐべきである。

菅 勲 菅勲 選

《8・18・19・20・58・71・83・94・133・145》

83 夕桜母校の生徒空爆に

安森 範明

昭和二十年七月二十五日、津久見市保戸島の

空爆で生徒一二七人が犠牲になったのを思い出しました。この様なことが世界で起こらないことを祈っています。

吾 亦 紅 選

《30・31・37・64・88・124・134・147・160・203》

147 遠い目の今年までかと田水張る

鎌倉眞由美

「遠い目の」に作者の想いの総てが。決断の時が来た。

坂本 一光 選

《31・55・111・120・125・145・198・207・210・211》

210 年をとるとはかういふことか蝸牛

天田 泉美

こういうことがどういふことかを句は言わない。この句に、自らを生活教育学者。人類生活者と言った溝上泰子の言葉が重なった。「いま人類史の立場から日常生活が問われている。自分が自分を生きるが大切で、生活即学習、学習即生活が、私の生きる原点である。

たゆまざる歩みおそろしかたつむり
これです」来し方を振り返り作者は蝸牛に自らの姿を重ねたのであると思った。

赤峰佐代子 選

《7・12・45・75・76・118・153・174・211・212》

7 春播きの芽の隙間にも世事を知る

溝部 文夫

種を播く……かわいい芽が出る……。小さな畑でも想像していた以上の喜びを感じる畑。作者は、それに浸るだけでなく最近のニュースや

出来事が気になり、いろいろ考えてみる。
中七の「芽の隙間にも」とあるが作者にとつては大きな「世事」だった…!? うまいなあと思つていただきました。

上野 一子 選

《12・58・63・75・85・120・131・198・199・203》

足立 町子 選

《4・77・92・105・120・128・137・150・158・184》

120 菜の花も好きな列車があるらしい

中摩みや子

私たち人間のこだわりというものは留まるところを知らない。世に言う鉄ちゃんと呼ばれる人たちは列車の種類、形、色、汽笛、走行中の音、車輛で使われている椅子の座り心地、など言いだしたらきりが無い程の一つ一つにこだわる。嬉嬉としてそれらを追い求めていく。線路わきの菜の花が近づいてくる列車の音をきき「あっ、これは私の好きな赤い一両車だ、」とうるうるしてもいいじゃないか。そういえば誰かに聞いた気がする。素敵な句。

夢野はる香 選

《16・31・53・77・79・100・105・122・176・220》

赤峯 友子 選峯友

《26・53・76・90・91・92・184・199・211・212》

91 向日葵のまん中にある火の記憶

足立 攝

夏の象徴である向日葵は力強く、生命力を感じ

じる。中心部がおとす影は濃く、くらい。まん中にある火の記憶とは、忘れてはならない悲惨で痛ましい戦争の記憶、原爆の記憶である。世界の平和を強く祈らずにはいられない。

有永真理子 選

《31・35・38・84・88・92・110・120・147・149》

森山 秀子 選

《4・37・51・56・66・68・78・127・137・162》

川畑英里花 選

《4・39・40・90・91・105・120・162・175・211》

91 向日葵のまん中にある火の記憶

足立 攝

向日葵は英語でサンフラワー（太陽花）。太

陽を象徴する花だ。そんな向日葵の中心部分には火の記憶があるという句だ。「向日葵は今の花姿になる前はメラメラと燃えていた。その記憶ははまだ花の中心部に残っている」と作者は言っているのだろうか。
地球だって46億年前に誕生した時は真っ赤なマグマの海だった。次第に冷えて今の地球となるが、中心部はまだマグマの状態です。太陽と変わらないくらい高温だ。
向日葵も外からは見えない熱い火を抱える存在という設定は素直に共感できるものだった。
そして、この句において向日葵は作者自身であるように思う。作者の今の生き方からは読み取れない、熱いマグマのような何かを抱えて生きていく、それを自覚している作者像がこの句からは立ち上がってきた。

今回の「第1回雑詠句会」について

◇今回の第1回雑詠句会は十年に一度の「九州現代俳句大会」を間に挟んだため、投句と選句の期間が空いてしまいました。そのため自分で出句した作品を忘れ、ご自身の作品を選句してしまつた方が複数名いました。今回はその得点も有効としましたが、投句控えを取るなどの対策をお願いします。

◇作品の上に振つてある通し番号は、選句の時と今回の発表の時とは違うものになっています。それは選句の時とは同一作者が並ばないようにシヤッフルしてあるからです。したがつてみなさんから送つていただいた選句番号は、事務局で発表順（作者別）番号に換算して、振り直しています。

◇今回は10句選になつていましたが8句選、9句選の方がいました。そうすると事務局では確認の必要ができません。選びたくない作品を無理に選ぶ必要はありませんが、選句の末尾に「以下余白」または「以上」と書き、それが選者の意思であることを示してください。

◇短くてよいので、選句だけでなく選評にも挑戦してください。特に新入会員の方は心掛けてください。人の作品を正しく読む練習をすることが、結局はご自分の俳句上達の近道になります。

第2回雑詠句会 選句用Ⅱ作品集Ⅱ

会員77名から231句が寄せられました。これを順不同にシャッフルしています。この中から10句を選び、その中の1句に選評を書いてください。選句の要領は巻末を参照してください。

1 身に細る恋もあるらむ雪兎

2 松ぼっくり五つ拾って娘へ散骨

3 スクラムで造花を退かす野水仙

4 冬の星われにも欲しい充電器

5 山粧ふ広き空なる過疎の村

6 しんしんとこの世の端に老いて雪

7 子等の声確かに伸びる黄水仙

8 露の臺持つてのひらも濡れている

9 玉葱を吊して遠き空にあう

10 もう膝に来る子はおらぬ屠蘇の酒

11 放尿の音が歌えば春の川

12 新居には春の息吹きと木の香り

13 秋茜つかず離れず夫婦です

14 大根に恋の相場を聴いてみる

15 ガザに死すジャーナリストの暗い冬

16 捨てられる古書の温みや寒の月

17 銃を離せよ冬薔薇が咲いている

18 上り坂たすき競り合ふ北風の五区

19 妻を呼ぶ夫の呼び声冴え返り

20 老上手着こなし上手衣更

21 灯明のなか輝の合掌

22 過疎すすむローカルバスの春決戦

23 家族来る面会を待つ小春の日

24 国宝を見たね見たわよ賀状書く

25 卵肌湯舟に浮かべ除夜の鐘

26 夕暮をもて遊んでいる蕪大根

27 帰らざる歳月よぎるもがり笛

28 峡に生き今日は梅見の客となる

29 一紋付の思いもよらず冬三昧

30 蝉しぐれ続く未来にリズム良く

31 卒業歌肩の力が抜けぬ子等

32 引き算が整いました冬景色

33 書初めに己の覚悟示しおり

34 関あじ関さば飛び火悲惨冬に入る

35 長生は哀しくもあり日向ぼこ

36 脱皮した顔で二人の年酒酌む

37 大きくさめ新婦続けてどつと湧く

38 鴨三羽水の上で寒かるに

39 ショパン聴く幽かな余韻はるの雪

40 十二月八日たましひといふ忘れ物

41 100年の昭和も遠く年明ける

42 衣被ぎつると剥けて友の笑み

43 この人でなかったかもと日向ぼこ

44 初夢のなかに手を振る母がいた

45 魂を襷に込める二月かな

46 夕焼けをスマートホンにしまい込む

47 置き去りの植木鉢より春の歌

48 またひとつ葉がふえた秋の日よ

49 煮凝りが繋ぎ止めてる父と兄

50 我が心凍雲去りて笑み戻る

51 肩肘を張らぬがいいね寒の水

52 ひび割れた指先見つめ亡母想う

53 冬の雲ちよとどいてくれないか

54 水仙の花芽ぼっこりうふふふ

55 戦後とは元帥・ヤミ米・平和主義

56 遠来の客微笑みし常鵜

57 冬薔薇孤独を注ぐゴブレット

58 人生の意義問うてみる冬至の湯

59 引きこもる母のもとにも小鳥来る

60 倒れ込み渡す襷や風牙ゆる

61 待つてくれ遅いんだもうレモン一滴

62 人間の呻き届かず冬深む

63 心棒の歪みし独楽や水の星

64 蓑虫のいつもどこかが揺れている

65 「中吉」は身の丈の吉小正月

66 葺石に思惟の記憶や冬ざるる

67 熔け合ふまで抱きすくめるや雪女

68 風花の地上に落ちるまでの夢

69 冬の薔薇遺して兄は旅立てり

70 手水鉢の水輝かす初美空

71 人生の小道に垂れる実南天

72 寒灯に露天湯の湯気まといつく

- 73 我もまた咲かずに終わる寒牡丹
74 しめ飾り五十年目の掛ける釘
75 南天の実が項垂れる暈の間
76 初詣うそが上手になつてきた
77 春を呼ぶ鷺の飛翔や水の綾
78 クリスマス孤独に走る暴走車
79 屈強な隊員三人冬の夜
80 原発や己れ限りの海鼠猟
81 新年会老いの手が振るハンドベル
82 寒雀踊るふりする神楽殿
83 青春の秘話は桃から洩れてくる
84 吉報の東風に吹かれし親子かな
85 若沖の鶏が淑気を啄めり
86 手鏡に桜の記憶のせてみる
87 中世の文書一枚淑気満つ
88 師走の荷落ちし水たまりも故郷
89 背もちぢむ傘寿の春にお赤飯
90 病むこともまた糧となる冬銀河
91 今日もまた何も起こらず小鳥来る
92 炬燵出し丸まる猫とお茶にする
93 小春日のシャネルスーツに袖通す
94 枯蓮や金星紅旗の五芒星
95 枯草の根つ子密かに生命の灯
96 底冷えの里に住む我寂しがり
97 補聴器で妻の愚知きく夜長かな
98 綿虫や魂は持たぬと云ふ掟
99 凍みる夜や空にこぼした金平糖
100 回診の医者の一言冬の月
- 101 ほんたうの雪の白さを確かむる
102 奏でるやドレミファソラシ虎落笛
103 髪洗う力の外の乳房かな
104 柏手に夢の一部をまだ添えて
105 梅咲いて無住寺の闇甘くする
106 ホーバーの音さえとけて海はなぎ
107 一隅を照らせ不屈にねじり花
108 毀れゆく村に寒星睦み合う
109 厳寒を切り裂いてゆくスポーツカー
110 冬ざるる特攻兵士の顕彰碑
111 暇乞い引き受けられぬ寒椿
112 あかときの淑気漂う御神木
113 書初めの馬の字跳ねて夢を追う
114 虎落笛百年をいま吹き抜ける
115 初日記同じ言葉で始まりぬ
116 春寒や嬰兒のこぶしは無限大
117 産みたての寒卵や母に娘がふたり
118 雲流る冬満月をころがして
119 八十下る荷軽くして老いの春
120 実南天白い帽子が重たかる
121 水仙の香りまといし兵士の墓
122 十二月八日白線踏みて躓きぬ
123 赤蜻蛉信号待ちのヘルメット
124 石ころを小さく蹴って夏終る
125 家かえるひとことに揺れる秋桜が
126 春日向このまま溶けてしまおうか
127 啓蟄や我も浮かれて旅に出る
128 音沙汰の気になつている片時雨
- 129 鏡餅親父の杵でつき始め
130 月凍る人の狂気と地の悲嘆
131 ケース雛転けてるままの笛奏者
132 粉雪や指紋のように妻の背に
133 一輪の梅灯しける厨かな
134 懇ろに金縷梅ほどく深空あり
135 ベネズエラ何が何だか春遠し
136 嘘つけぬ障子の影も古希となり
137 オペ終えてただ「ありがとう」冬廊下
138 五年日記余白撫でおり石露の花
139 竹山の三味が迷いを叱る冬
140 禁教の島に輪を描く冬鳶
141 メタセコイアにすんと空が落ちて冬
142 人の世へ花正月の鐘響く
143 老年の生活を照らす実南天
144 恭しくバットに置かれ臓器凍つ
145 並木にもまだ咲いている雪の花
146 立ち位地を変えぬ勇氣や水仙花
147 去年今年貫く平和といふ二文字
148 吾を産みて満州の地に母逝きぬ
149 初詣鈴の余韻を持ち帰る
150 短日の闇に向かいて歩き出す
151 しめ飾り捨てるに惜しいいい仕事
152 大リーグチラ見に適す掘り炬燵
153 むつまじい妻の顔して初詣
154 たまわりし余生をホウに老いの春
155 地球儀を回せば戦車クリスマス
156 夫人院猫と二人の師走かな

第1回雑詠句会

＝ 作品募集 ＝

※大分県現代俳句協会では、内部の勉強会として年三回の通信句会を開催しています。今回募集するのはその中の一つで、会員なら誰でも応募できます。（投句は会員だけです。選句は会員外もOKです）

※一人三句。当協会には未発表のもので、なるべく当季（今ごろの季節）のものを「用意ください」。

※作品は自動的に「年間一句賞」の対象になります。（年間一句賞は総会で表彰します）

※締切は五月三日（日）連休前です。なるべく早めの投句にご協力ください。

※送り先は事務局（〒879-7151大分県豊後大野市三重町西泉436足立攝方 FAX 0974-22-3749）

※同封のFAX用紙でお近くのコンビニからお送りくださると便利です。送り方はコンビニにおたずねください。その他、郵送やメールなど、読めさえすれば形式にはこだわりません。

- 157 修験道錆びた手鎖り山眠る
 158 縄文の壺から出でし麦の糧
 159 秋うらら思を馳せる昼下がりに
 160 冬瓜よわが肉体の静かなり
 161 パンジーの震える先や守り神
 162 点在の仮設残して雁帰る
 163 抽斗に遠く来ている春の声
 164 父に似て父より無口嫁が君
 165 手に大根山河の白き重みかな
 166 御先祖に生きている今感謝す
 167 眠るには十分過ぎる虫の声
 168 坑口へ足元照らす冬銀河
 169 物言わぬ赤提灯が冬を呼ぶ
 170 七重八重あの山吹の色ぞふたたび
 171 冬桜五分遅れの帰国便
 172 火事避難ご寝籠の夜を過ごす
 173 あのねのねひそひそばなし女正月
 174 新年は笑いの神に酒を酌む
 175 初明り優しく拭う献花台
 176 去る秋を引き止めたくて日記閉ず
 177 夢にでも出て来て欲しい嫁が君
 178 寒紅や歌舞伎女方の妬ましき
 179 歩み来しいろはの坂や仏の座
 180 おせち待つ皿を見つめるカレンダー
 181 どの坂も転んで起きて初山河
 182 恋猫のバスはいつしか戦場へ
 183 今日はずもう雪の峠を超えていく
 184 一炊の夢は春野を駆け抜ける
 185 春愁を集めてばかり廃校舎
 186 大寒の玄関ドアが意地をはる
 187 賑やかに郷土自慢の雑煮餅
 188 加湿器がどんと陣取る冬日かな
 189 手を合やすことの幸せ初詣
 190 入浴剤入れて春めく終い風呂
 191 家系図や火鉢の灰のつらなりて
 192 雪景色高原の冬は凜として
 193 突然の眩暈に支配され二月
 194 雪あかりわたしを知らぬのはわたし
 195 冬薔薇狭庭に光あつめたる
 196 空澄みて駒のいななき春告げる
 197 幼な子やガザの苦しみ聖夜かな
 198 読初の所属の俳誌師の遺作
 199 マフラーを巻いて銀座の風を切る
 200 紅梅のつぼみを乗せた青い空
 201 還らざるガザの子どもや春の月
 202 盃に桜ひらひら舞い落ちる
 203 春服の青年ひよいと跳ねてゆく
 204 忘れものいつかはきつと春の風
 205 初場所やウクライナへとほの明かり
 206 初日の出迎えに延びる灯り帯
 207 色変えぬ松の真実紙風船
 208 餅食うてマラソン応援ひと日終ゆ
 209 遠き日の古橋・白井に魔女9人
 210 秋坐禅棒の先なる宇宙かな
 211 菜の花の沖を父母陰となり
 212 瑞雲の向う側まで春の海
 213 頑なな男の背中初日さす

- 214 「目を覚ませ」千回叫ぶも冬の影
 215 幸不幸しまひは薄墨風花す
 216 春を待つ転がった石こぼれ種
 217 もぐら打ち声張りあげる学童園
 218 葺石の尖る音して冬に入る
 219 ついてくる精霊蜻蛉きみは誰
 220 首都うつろ月下にビルがまた伸びる
 221 孤独群がる爆音のクリスマスソング
 222 ぼつねんと金柑揺れている孤独
 223 何も無き事の幸せ去年今年

- 224 愛あれど恋無き日々や寒灯下
 225 禁酒中ひと口試す初詣
 226 あの頃は炬燵に足が十二本
 227 河豚鍋に愚痴を沈めて笑い合う
 228 それぞれに程良い幸が待つ炬燵
 229 独り居に短日の影忍び寄る
 230 流れ星に祈る聖夜の病窓
 231 さからはぬ齢となりし春夕焼

(以上)

右の231の中から10句を選句してください

- ◆12ページからこのページにかけて掲載の「第2回雑詠句会作品」231句の中から10句を(選句)し、その中の1句に二百字程度の(選評)を書いてください。選評は短くても、多少長くても、書かなくてもかまいません。
 ◆選句・選評には当協会の会員以外の方でも参加できます。当協会は俳句の多様性を尊重しています。なるべく多くのご意見をうかがうことが、私たちにとつての勉強であり同時に刺激でもあります。ぜひ、ご協力をお願いします。
 ◆選句は番号の若い順に並べて書いてくださると助かります。ただし、用紙を汚してまで書き直す必要はありません。
 ◆間違いを防ぐために作品番号と同時に上五も書きください。事務局九年の経験の中で、作品番号と上五が完全に一致したことはほとんど

- ありません。違った場合は上五を優先します。
 ◆当たり前のことですがご自分の名前を書くこともお忘れなく。書き忘れている人がいます。
 ◆作品は基本的に事務局到着順に受け付けたものを、同一作者のものが並ばないようにシヤツフルをかけています。誤字や脱字、送り仮名違いの疑いがあっても、判断に苦しむものは、原句の通りに掲載しています。
 ◆選句・選評の締切は5月3日(日)までお願いいたします。14ページ「囲み記事」の「第1回雑詠句会」の投句締切日と同じです。
 ◆同封の選句用紙を使うと、どのコンビニのファックスでも50円(ほとんど)で送れます。使い方が分からないときはコンビニにおたずねください。自宅のファックスで送ってもOKですが、筋が入って読めなかったり、ローラーの

吸い込みが悪く二枚に及ぶことが多発しています。自宅にファックスがある方でも、メンテナンスに自信がない方はコンビニをお勧めします。
 ◆ファックスで送る場合の一般的注意として、エンピツ等の字の薄いもの、画数が多いのに小さな字(潰れて読めないことがあります)は、お避けください。
 ◆選評などで誤字脱字や読みにくい文字がたくさんあります。事務局では簡単に無効にせずにか読み解こうとするため、何倍も時間がかかることになりました。辞書で確かめ、「中学生でも判読できる原稿」にご協力ください。

◆第一回雑詠句会、第二回雑詠句会、自薦作品の年三回の通信句会は協会内の勉強会ですから投句料は発生しません。また内部の勉強会ですから、たとえ高得点の作品でも「大分県現代俳句大会」に投句できません。ただし他団体に応募する場合は、この限りではありません。

【新会員のみなさんへ】

◇当協会は会員相互の「教えあい学び合う気風」を重視しています。俳句を作りそれを仲間に見てもらふこと、また仲間の俳句を読み、その優劣を自分なりに判断することは、俳句活動の基本です。これに参加するかどうかは会員の自由です。作品も、選句も、選評も、「人の目に晒すこと」が上達の近道です。
 ◇自分の句に行き詰まったとき、解釈の難しい作品に出合ったときなどは、遠慮なく事務局にご相談ください。事務局は会員と協会を繋ぐ「窓口」の役割を果たしています。



大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 足立 攝



《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 町子 方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL:<http://www.gendaihaiku.net>

E-Mail: info@gendaihaiku.net